

『福澤諭吉の原点』 中川眞弥

岩波文庫四月新刊の一つとして、『福澤諭吉の手紙』慶應義塾編が出た。二〇〇三年一月に完結した『福澤諭吉書簡集』全九巻に収録された二千五百六十四通の手紙の中から五人の編者が百十八通を選んだものである。情報の伝達には手紙が最も有効な手段であった時代に福澤諭吉は沢山の手紙を書いた。今に二千通以上が残っているのは珍しい例だとか、それらの手紙から百十八通を選び、主題に則して、「原点」、「慶應義塾 理念と経営」、「理財と実業」、「民権と国権」、「人間交際」、「家庭と日常生活」の六項目に分けて載せている。

手紙文というのは、その時々感情や世情の表現があって、歴史の推移を重ねて読むと大変面白い。そうか！、なるほど！と思うことが多い。他人の書いた手紙を読んでどこが面白いのか？という人もおられると思うが……、福澤諭吉の考え方を知る上でその手紙の内容は大変興味深いものがある。

そこで、HP毎月のコラム欄で、岩波文庫『福澤諭吉の手紙』から主題ごとに、「これは！」と思うものを一つずつ挙げてご紹介してみたいと思う。

先ず初めの「原点」では、何ととっても明治二年松山棟庵宛のものが当時の福澤諭吉の考えを伝えて妙である。

松山棟庵の「紀州の学校についての問い合わせ」に応えたものだが、「大げさな学校を作るよりも国中の手習師匠を再教育して、論語の代わりに『窮理図解』などを手本とし、また、日本地理の書、国史略などの書や、『モラルフィロソフィ』の訳書を著し、ひたすらコンモン・エデュケーション（普通教育）に心を用いること」を松山棟庵に薦めている。そして、「漢学者流の悪風は、書を貴び文を重んずるなどと唱え、聖人の道は高しとて平人を導くを知らず」と記して、「学問の奴隷では、この国を独立させることは出来ない。」「小生あえていう、一身独立して一家独立、一家独立一国独立天下独立と。」

そこで、一身を独立させるには、先ず西洋の智識を開くことだと考える福澤は、「事々物々朝々暮々の話に、天地万物世界諸国の事を自然に知るように致したき義に御座候。」と強い調子でその考えを書き送っている。

この手紙には、福澤が幕末から明治初年にかけて出版した『窮理図解』『世界國盡』『童蒙教草』『文字之教』など数々の開明書の構想がそれとなく記されていると指摘できる。他にも後の『学問のすすめ』で説かれ、福澤終生の主張となった「一身独立して、一国独立す」が、早くもこの明治二年の手紙で明らかにされているのも興味深い。

今、NHKの大河ドラマで『新選組』を放映している。このドラマの年代はおよそ一八六二年から一八六八年へかけてのことである。その同じ頃、一八六〇年、六二年、六七年と福澤諭吉は三度の洋行を重ねていた。近藤勇・土方歳三の世界とは、なんとか離れていたことかと思う。さまざまな思想のうねりが歴史を動かしてきたことを考えると、現代は何がうねっているのだろうか？福澤が明治二年の手紙に記した「個の確立」は、この国では未だに確立できていない！のではないか？

福澤諭吉、明治二年の手紙は、現代の我々にとってもちょっと考えさせられる内容ではないかと思う。

(『福澤諭吉の手紙』の編者五人の一人、西澤直子さんは児研三田会員である。)